

# 札幌新まちづくり計画市民会議 環境・都市機能分科会第1回会議

会 議 録

平成15年12月10日(水)午後6時開会  
札幌すみれホテル 3階 ヴィオレ

## 1 開 会

事務局（企画部長） 定刻ですので、環境・都市機能分科会を始めさせていただきます。

本日は、お忙しい中ご出席していただき誠にありがとうございます。太田委員におかれましては、所用で遅れるがぜひ参加したいとのことです。

また、関係職員が大勢参加させていただいていますが、この分科会に対応して市でもプロジェクトチームをつくり資料作成に携わっています。また、本日いただくご意見などを取りまとめるために出席させていただいています。

それでは小林先生お願いします。

## 2 会長あいさつ

小林会長 夜遅くありがとうございます。熱心な議論が他の分科会でも行われているようです。回数がありませんので、だらだらしない議論にしたいと思います。ご協力お願いします。

全体会議の中で内田座長が何度もお話になり事務局からもご説明がありましたが、この会議のタスクはかなり明解であると思います。皆さんの考え方、思い等を背景にしなご発言をお願いしたいと思います。

それと2時間半という時間を有効に使いたいと思います。資料説明で3分の1くらいかかりそうな気もするので、50分ずつ休憩を入れながら、あまり無理をせずに進めたいと思います。あまり発言者が偏らず数多くご発言いただければと思いますのでご協力をお願いします。最低4回は発言していただくという、お互いの発言の機会を確保するルールで進めましょう。

それから、文化・人づくり分科会の木路委員が分科会の席で体調を悪くされてそのまま他界されたということです。心の中で黙祷していただければと思います。

## 3 議 事

小林会長 それでは議事に入ります。資料がいくつかありますので、それに基づいて事務局から説明をお願いします。

### （1）分科会の進め方について

事務局（調整課調整担当係長） それでは分科会の進め方について事務局からご説明申し上げます。資料の1をご覧ください。

この進め方に関する資料は、あくまで標準的なものとして事務局が提示するものという位置付けなので、分科会ごとに話し合いの上適宜変更していただいて構わないとご理解いただきたいと思います。

分科会の第1回目、すなわち本日は、私どもが考える重点戦略課題に沿った「現状と課題」などをご説明させていただいた上で、意見交換をしていただいて、検討のテーマ

を整理していきたいと考えています。

第2回目は、今月22日を予定していますが、1回目に整理をした検討テーマに沿って、この3年間で重点的に取り組むべき事柄について、委員の皆様からのメモを含めてご提案をいただきたいと思います。

また、当日、事務局からは、庁内プロジェクトで検討した「施策の基本方針」などについても、皆様の議論を進めるご参考にご説明させていただいて、意見交換の上で中間的に取りまとめをしたいと考えております。

その後、第3回目の全体会議において、提言書の枠組みを整理した後に、分科会を再開し、その枠組みに沿って再び意見交換をしていただいて、内容を取りまとめていくことを想定しています。

小林会長 という進め方の提案ですけど、よろしいでしょうか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

小林会長 ありがとうございます。

## (2) 確認事項(委員提出メモの扱いなど)

小林会長 それでは資料の確認。

事務局(調整課調整担当係長) 委員提出メモなどの取り扱いについて分科会ごとに決めていくということでしたので、その取り扱いについて議論をしていただければと存じます。

小林会長 具体的には。

事務局(調整課調整担当係長) 原則として、この会議は公開ですので委員のメモについても公開であると考えられます。ただし、メモといっても2通りあると思います。チラシや新聞のコピーの類については、非公開としてはどうかと考えています。一方、自らが作成された委員の意見が述べられているようなメモについては公開としてはどうか。ただし、これらのことについてもご本人の都合をその都度確認した上で公開、非公開を決めてはどうかというのが事務局の案です。

小林会長 ということはどういうことですか。

事務局(調整課調整担当係長) 本日の資料が数点ありますが、新聞あるいは雑誌からのコピーについては非公開でいいのではないかとということです。それ以外に自分の意見が述べられているようなものを作成していただいて、議論の参考に出すという場合には、原則公開かと考えています。

小林会長 どういう資料を使って議論をしたのかということは残りますよね。

事務局(調整課調整担当係長) はい。それはあるので、チラシ、新聞などの類のものについても含めて公開するという考え方も考え方としてはあると思います。

林委員 非公開にしようという意図をお聞かせください。

事務局(調整課調整担当係長) 基本的には中身に委員の皆様の意見が入っているもの

については公開をして、そうでないものについては公開をしなくてはいいいのではないかと  
いうそれぐらいの理由です。

小林会長 一応こういう資料を使いましたということで公開しましょう。

林委員 特に支障があると思われるものについて事務局の方でどう判断されるか。

小林会長 事務局ではなくてこの委員会で決めなくてはならない。

中井委員 公開というのはどこまで公開しますか。

事務局（調整課調整担当係長） インターネット上で公開されます。

中井委員 例えば自分の意見の場合、書いたものがある場合、全部公開されるわけですか。

事務局（調整課調整担当係長） はい。

中井委員 それはどういう形で。写し取って全部インターネットに載せるということですか。

事務局（調整課調整担当係長） 基本的にはすべてインターネット上で公開します。例えばPDFファイルとか、いろいろ手法はあると思いますが、すべて公開ということですよ。

小林会長 いいんじゃないですかそれで。中島さんの提出資料はどうしますか。

中島委員 私は参考資料に持ってきているだけなので、どこを見れば分かりますということでは構いません。インターネットに公開するときこれを写し取ってということをする、それは税金のむだ使いになるような気がします。

小林会長 では、中島委員のフィルムコミッションの資料、これはこういう資料を使いましたと、頭にちゃんと書いておいていただくことにしましょう。

今この話を原則にしながら進めていきましょう。

### （３）事務局説明（配布資料など）

小林会長 それでは引き続き資料について説明してください。

資料２「『札幌新まちづくり計画』に関連する主な個別計画・審議会等」

資料２の１「札幌新まちづくり計画の位置付け」説明

事務局（調整課調整担当係長） それでは資料２をご覧いただきたいと思います。その他に資料２の１というものもお配りさせていただいていますのでご説明申し上げたいと思います。

これは、新まちづくり計画の基本目標の一つである「世界に誇れる環境の街さっぽろ」に関連する主な個別計画（部門別計画）を、関連が深いと考えられる重点戦略課題に分類したものです。

各々の計画の概要については、事前に送付しているので、内容の説明は省略して、本日は、これら部門別の計画と長期総合計画や新まちづくり計画との関連などについて、

本日お配りした資料2の1で説明したいと思います。

この資料は資料2に関連して札幌新まちづくり計画の位置付けについて改めて確認させていただいたためもので、札幌市の計画体系の中で、この分科会の議論の対象がどういうポジションにあるのかを確認するものです。

1ページ目は、第2回全体会議でお示したもののなので、2つの要点のみ確認したいと思います。

一つは、上の囲みの1行目ですが、新まちづくり計画は、市長の施政方針である「さっぽろ元気ビジョン」を実現するための計画であると同時に、札幌市基本構想の理念を踏まえて策定した第4次長期総合計画の実施計画となるものということ。

もう一つは、新まちづくり計画の策定に当たっては、長期総合計画が示す施策の方向性に沿って、特に今後3年間に重点的に進めていくべきものについて、市民との共通認識のもとで、限られた財源や人材を集中していくべきものということです。

すなわち、新まちづくり計画は、長期総合計画の実施計画ですが、それを網羅的にカバーしていくのではなく、今後3年間に重点的に進めるべき施策や事業を計画化するものであるという理解です。

下にある図は今申し上げたことを見やすく整理したものです。

2ページ目をご覧いただきたいと思います。2ページ目は、1ページ目の下にある図を詳細に示したものです。大きな囲みが3つあり、長期的な計画、実施計画、単年度予算と整理しています。

政策や施策が実施にいたるプロセスは、一般的には、まず長期的な視点の下に計画を位置付け、次に財源との兼ね合いも考慮しながら中期の実施計画で具体化を図り、最終的に単年度の予算で事業実施を決定するということとなります。この資料はその一つのプロセスを示しているものとお考えいただきたいと存じます。

一番上の囲みは長期的な計画です。

第4次長期総合計画は、左の上の囲みにあるとおり「基本構想の理念に基づいて、さまざまな施策を総合的、計画的に推進するもの」であります。施策の体系につきましては「市民」「地域」「環境」「経済」の4つの項目でまとめるとともに、これらを支える「都市空間と交通体系」を加えて大きく5つの柱で構成しています。

右側にある、各部門別計画は、法令に基づくものや札幌市が独自に策定するものなど、さまざまなものがありますが、いずれも長期総合計画の基本的な方向に沿って策定し推進するものであるということです。

部門別計画には、各部門における取り組みを進める上での指針などを示す基本的な計画と、その他のテーマ別、地域別の計画があります。この分科会に関連の深い基本的な計画としては、緑色で表示してあります、現在改定作業を進めている環境基本計画と、ブルーで表示してあります、現在策定を進めている都市計画マスタープランがあります。

環境基本計画は、長期総合計画の「環境」部門に、都市計画マスタープランは、同じ

く「都市空間と交通体系」部門に概ね対応するものでありますが、2つの計画とも他の部門にも横断的に関連するものであり、この分科会の議論を進めていく上では、最も基本となるものと考えています。

中ほどやや下の囲みにある実施計画は、まさしくこの市民会議で議論をいただいている部分であり「長期総合計画の計画目標の達成に向けて、計画期間において展開すべき施策を選択し、その具体化を図るもの」であるという位置付けです。

新まちづくり計画の構成については、これまでもご説明しているのですが、細かい説明はいたしません。市民会議でご提言をいただくビジョン編が計画の考え方の部分を担い、重点事業編はその考え方に沿った具体的な事業を計画化するものであり、いずれも3年間に重点的に進めるべきものを具体化していくものというところにポイントがあると思っています。

従って、計画期間を5年間として策定してきた直近の5年計画では、左側にある通り、1兆8,700億円の計画事業費を計上して推進してきましたが、今後策定する重点事業編では、計画期間が短くなることを考慮しても、さらに相当程度スリムな計画になるものと想定しています。

資料2の1についての説明は以上です。

小林会長 ここまでご質問はありませんか。

(「なし」と呼ぶ者あり)

小林会長 冒頭にタスクが明快であると申し上げたのは、今の資料2の1の2ページ目の実施計画、平成16～18年についての理念と重点事業について皆さんの考えをまとめていただくということです。よろしいですか。

### 資料3「ビジョン編構成イメージ」説明

事務局(調整課調整担当係長) それでは続きまして資料3のビジョン編のイメージについてご説明させていただきます。

資料3は、11月19日に行われた第2回全体会議でご説明したのですが、私どもで考えているビジョン編の構成イメージということで、ご参考までに、改めて内容をご覧いただきたいと考えています。

内容を簡単に説明します。

まず、「さっぽろ元気ビジョン」に掲げる5つの基本目標ごとに、目指すべき将来像である「望ましい街の姿」というものを設定したいと考えています。その下には17の重点戦略課題がありますが、それぞれにおいて、その下に掲げる5つの項目を記述することを想定しています。

まず「(仮称)戦略目標」は、各重点戦略課題レベルで目指すより身近なブレイクダウンした将来像です。

次の「現状と課題」は、各重点戦略課題に関する札幌市の現状と取り組むべき課題に

ついて記述することを想定しています。

次に「成果指標」は、市民、企業、行政など、都市の構成員が共に目指していくまちづくりについての数値目標を掲げるものです。

次に「各主体の主な役割」。これは「(仮称)戦略目標」を達成する上で、都市の構成員に今後期待される役割について、簡潔に記述するものです。

最後に「施策の基本方針」。これは、その前段の行政の役割を踏まえて、今後3年間に市が進めるべき施策の方針をまとめるものです。

なお、繰り返しになりますが、この構成イメージは、最終的にまちづくり計画のビジョン編としてとりまとめる際のものであります。市民会議においては、これを念頭に置いて、ご議論いただきたいと考えていますが、議論の進め方や提言書の枠組みを固定化するものではないものをご理解ください。

#### 資料4「基本目標と重点戦略課題」説明

事務局(調整課調整担当係長) 続きまして資料4の説明をさせていただきます。

資料4については、11月6日の第1回全体会議に資料として提出した「札幌新まちづくり計画の策定方針」からの抜粋です。

この環境・都市機能分科会でご議論いただく事柄に対応する計画の基本目標と重点戦略課題をご確認いただく趣旨から、改めてお示しするものです。

新まちづくり計画では、基本理念「市民の力みなぎる、文化と誇りあふれる街」を達成するために「元気な経済が生まれ、安心して働ける街さっぽろ」をはじめとして5つの基本目標を設定しており、この環境・都市機能分科会でご議論いただくのは、網掛けをした部分の「世界に誇れる環境の街さっぽろ」の部分になります。

この基本目標を達成するために、札幌市として4つの重点戦略課題を設定しています。1つ目は、水環境の維持・回復やみどりの創出を内容とする「水とみどりのうるおいと安らぎのある街の実現」。2つ目は、地球温暖化の防止やごみの排出抑制などを内容とする「地球環境問題への対応と循環型社会の構築」。3つ目は、冬の遊びや雪対策などを内容とする「ゆたかな冬の暮らしの実現」。最後は、公共交通機関を軸とした交通体系の整備と都心のまちづくりなどを内容とする「歩いて暮らせるゆたかで快適な街の創造」です。

今後、この4つの課題に沿ったかたちで、「現状と課題」や「施策の基本方針」などについてご説明させていただこうと考えています。

資料4については以上です。

#### 資料5「現状と課題」説明

事務局(調整課調整担当係長) それでは資料5の現状と課題についてご説明させていただきます。資料5については、今ご説明した、4つの重点戦略課題に沿っ

て、現状と課題をとりまとめたものです。

あくまでも皆様の議論の素材としての資料であり、また、あらかじめ郵送させていただいておりますので説明は簡潔に行います。

#### 水とみどりのうるおいと安らぎのある街の実現

それでは最初に「水とみどりのうるおいと安らぎのある街の実現」という項目です。

ここでは3つの課題を掲げていますが、1つ目はやや総論的な記述です。

図1をご覧ください。札幌市の市政世論調査によりますと、98%にのぼる札幌市民が「札幌が好きだ」と回答しています。その理由としては、多くの市民が「みどりが多く自然が豊かだから」と「四季の変化がはっきりしていて、季節感があるから」といったような自然と調和した都市イメージを掲げているところです。こうしたことから札幌の魅力と個性を形成する水や緑などの自然環境について守り、育て、回復する取り組みが必要だという認識です。

次に「ゆたかな水環境と都市化の進展」という項目です。札幌市は南西部の大部分が山地となっていますので、そのゆたかな自然を有する山地を源とする多くの河川が流れています。特に上流域でゆたかな水量を保っています。都市化の進展による雨水の地下浸透量の減少などにより、支流や市街地内の河川では、河川水量が減少して、生物が生息し、人々が憩う場としての姿が失われているところがあります。

また、一部の河川では水質悪化が生じているほか、人が近づきにくい構造のために地域住民の関心が薄れてしまっている水辺も見られるところです。良好な水質を確保するとともに、今後は川に水を取り戻し、市民が自然と触れ合えるような良好な水辺を創出していく必要があるということです。

最後に「都市化の進展とみどりの役割」についてです。

これまでの公園や緑地の整備により、札幌の緑の総量は他の政令市と比べてもかなり高い水準にあります。一方、都市化の進展に伴い、市街地周辺、市街地内の緑は減少しており、郊外との地域格差も見られるようになってきています。地球環境問題や生物多様性の確保といった環境保全の観点からも、緑の役割に対する期待と認識が高まっている状況でもあります。今後は市民との協働を進め、残された緑を守ることを始めとして、新たな緑を創出していく必要があるという認識をしています。

図2をご覧ください。図2は、河川の汚濁の状況を示すBODつまり生物化学的酸素要求量と下水道普及率の経年変化を示しています。

下水道普及率が高まるにつれて、水質が改善されているのが分かりますが、近年は、環境基準値が見直されたこともあり、3地点で環境基準を超過している状況です。

それから2ページ目の図3は、河川護岸の整備状況と水辺へのアクセスのしやすさを示すグラフです。左側は、自然状態にある、またはそれに近い状況にある河川が少ないことを示しており、右側のグラフは、河川へのアクセスが困難な河川が少なくない状況

を示しています。

図4は河川の水が枯れている状態を、図5は水辺へのアクセスや既存樹木の保全などに配慮した河川整備の状況を示した写真です。

図6は、都市公園面積に関する政令指定都市の比較で、平成15年度当初における、都市公園面積の総量で、札幌市は神戸市に次いで第2位となっています。

ちなみに一人あたりの公園面積については第4位という結果になっています。

図7は、市街化区域における緑被つまり樹林地、草地、農地、水面及び公園緑地など植物の緑で覆われた範囲の状況を示していますが、厚別、清田、手稲の各区で高く、中央、白石、南の各区で低くなるなど市街地の熟度や地形、土地利用などによって地域格差が見られる状況です。

図8は、緑の基本計画で整理している緑の働きを整理したものです。これについては説明を省略させていただきたいと思います。

#### 地球環境問題への対応と循環型社会の構築

3ページ「地球環境問題への対応と循環型社会の構築」について説明させていただきます。

ここも1つ目の「環境問題の深刻化」は総論的な記述です。20世紀に高度に発展した大量生産・大量消費・大量廃棄型の経済社会活動は、私たちの生活に大きな恩恵をもたらしましたが、その活動の規模が自然が持っている再生・自浄能力を超えるまでに巨大化した結果、さまざまな環境問題を引き起こしているという現状です。将来の世代に良好な環境を引き継ぎながら、都市を持続的に発展させていくためにも、地球温暖化など地球規模で広がる環境問題に取り組むとともに、環境への負荷の少ない循環型社会を構築していく必要があります。

続きまして2番目は地球温暖化と二酸化炭素排出の状況です。化石燃料の大量消費等により、二酸化炭素を始めとする温室効果ガスが急激に増加し、地球温暖化が急速に進んでいる状況です。気象庁によると陸上の気温などはこの100年間で約0.6度上昇しているという報告がなされています。

図11、12を参照しながら聞いていただきたいのですが、札幌市で排出される温室効果ガスの95%を占める二酸化炭素は、その大部分、85%を民生部門と運輸部門が排出しており、全国と比較すると、特に民生部門の割合が高いという特徴があります。

一方、市民や事業者の環境行動については、地球温暖化問題に対する危機意識がない、あるいは何をすべきか分からない等の理由で、多くの人が行動を起こしていない実態にあると考えられます。地球温暖化を防ぐためには、市民一人一人がこの問題の深刻さを認識し、日常生活や企業活動の中で省エネルギーを始めとする環境行動を実践していくことが強く求められると考えてます。

3番目はゴミ処理の状況と今後の見通し、ゴミの問題です。図14をご覧くださいな

からお聞きください。札幌市のゴミ処理量は平成3年度に118万tとピークを迎えた後、事業系ゴミのリサイクルの推進に加え、家庭系大型ゴミの個別収集・有料化や容器包装の分別収集を開始したことなどから、平成10年度以降は100万tを下回るなど減少傾向となりましたが、平成14年度は再び増加傾向に転じています。今後、リサイクルの推進や有害物質の排出基準の強化などにより、多額の処理費用が見込まれる一方で新たな埋立地の確保も困難になってきていることから、ゴミの発生抑制に即ちそう取り組んでいく必要があると認識しています。

右側の図表をご覧ください。

図9は、地球温暖化のメカニズムを示したものであります。太陽光線で暖められた地表から赤外線が放射されますが、それを温室効果ガスが吸収する。今までは良い状態を保たれていましたが、人間活動によって急激に増えてきて温室効果が高まっている状況です。

図10は、平成2年度を100とした場合における一人当たりCO<sub>2</sub>排出量の推移を示したものです。札幌市は、全国や北海道を超える増加を示している状況です。

4ページ目は先ほど市民の環境行動についてご説明しましたが、その状況をお示しするグラフです。第1回の全体会議の際にもお配りしました市民アンケートの一部を掲載したものです。上のグラフは「世界に誇れる環境の街さっぽろ」を実現するために必要なことを複数回答していただいたものです。「二酸化炭素排出量の抑制」というようにありますが、このCO<sub>2</sub>の排出抑制に関することは選択肢を示した中では最も回答数が少ない状況でした。

下の「今後のまちづくりに関する意見」は意見が少なかったものですから直接アンケート結果からは見て取れませんが、今後のまちづくりに必要だと思ふことの自由記載を、その内容によってカテゴリー分けしたものです。地球環境の保全に関する意見は10件。率にすると1%に満たないことから、この分野の関心が高くないということが分かります。

#### ゆたかな冬の暮らしの実現

次は5ページ目「ゆたかな冬の暮らしの実現」という項目です。

まず「多雪寒冷の拠点都市」ということで、図15と見比べながらご覧いただきたいと思います。札幌市は冬期間の降雪量が5mを超えて、最低気温が氷点下となる日が年間130日あまりもあることから、世界でも屈指の多雪寒冷都市であるということです。多雪寒冷な気候特性はスキーや雪まつりといった個性的な市民文化を育てて美しい自然の景観や貴重な水源などのゆたかな恵みをもたらしてきました。その一方で、冬場の暖房には多大なエネルギー消費が必要です。あるいは市民生活を支える上で、雪対策ということが必要になってきます。こういった特有の課題にも取り組み続けてきました。今後はこうした特性や課題を踏まえ、北国らしい暮らしをさらに充実させていく必

要があると考えています。

雪に親しむ暮らしの状況については、近年、子どもたちが戸外で遊ぶ機会が減っておりまして、それは特に冬期間に顕著になっています。また、スキーなどのウィンタースポーツについても全体的に低迷が続いている状況です。冬の遊びやスポーツは、健康づくりや仲間づくりなどを通じて冬の生活をゆたかにする大きな市民文化であることから、今後も活性化していくことが必要です。

最後の除雪に対する市民要望と協働の取り組みですが、除雪に対する市民要望は昭和53年度以降連続して四半世紀にわたって1位を占めています。除雪に要する経費については、除雪が必要な距離が年々延長することなどから、増加傾向をたどっています。第1回の全体会議でもご説明しましたように、厳しさを増す財政状況のもとで、多様な市民ニーズにこたえていくためにも、市民、企業、行政の役割分担を明確にした雪対策を進めていく必要があると認識しています。また、除雪だけでなく、上手に雪を活用していく取り組みについても進めていく必要があります。

図17は小学校の生徒さんにアンケートをした「冬季の公園利用意識の変化」で、北海道開発局が2002年の寒冷地技術シンポジウムで報告したものです。2つグラフが並んでいますが、左側は外で遊ぶ頻度がどうなっているかのグラフです。そのグラフの左側が冬場、右側が夏場となっています。色で申し上げますと緑と青の部分が週に3～4日以上遊ぶと読み取れますが、冬についても夏についても減っています。冬場の減少が著しいと読み取れます。

下のグラフは除雪の延長と除雪決算額になります。おおむね札幌市の降雪量は5m程度が平均です。中でも平成7年度の除雪決算が突出しているのが見て取れますが、この年は記録的な豪雪で670cmあまりも降ったということで、200億円を超える除雪費がかかりました。

#### 歩いて暮らせるゆたかで快適な街の創造

最後に「歩いて暮らせるゆたかで快適な街の創造」ということで、最初の「都市の再構築の視点」は総論的な記述になります。少子高齢化の進展や環境問題の深刻化、財政的制約などの状況のなか、今後は既存の都市基盤を上手に活用することが重要です。外延的な拡大の抑制を基調とした市街地内にさまざまな拠点をバランスよく配置することや、居住機能を中心に多様な都市機能がまとまりをもって構成されることを重視して、都市構造をコンパクトに再構築していく必要があると認識しています。とりわけ、都心や地域の中心など多くの人が集まる場である拠点にそれぞれの特性に応じた多様な機能と快適な空間が確保され、そこに環境負荷の少ない公共交通で誰もが容易に訪ねられることが、都市生活の質を高める上で重要であると考えています。

続きまして公共交通の利用の問題です。地下鉄やバスなどの公共交通は、利用者の減少が続き、経営面で厳しさを増しています。札幌市の人口は186万人に達しています

が、こうした大都市の交通需要を効率的に処理する公共交通機関は、環境への負荷が少ないだけでなく、車を運転できない人が歩いて移動することを支える交通手段としても不可欠なものです。今後は、札幌市における都市交通のあり方を検討しながら、公共交通の利用促進を図る必要があると認識しています。

その下は地域のまちづくりの問題です。多くの人が集まる地域の中心では、生活基盤が未整備だったり、地域の活力が低下しているなど様々な課題を抱えている場合があります。地域の中心となる拠点の中でも、特に駅やターミナルなどがある交通の要所私どもでは交通結節点と呼んでいます。そこでは、交通機関相互の乗り継ぎがスムーズにできなかったり、歩行者と自転車がお互いに安心して通行することができないなどの問題も見られる状況です。今後は、こうした地域の課題に応じたまちづくりをしていく必要があるものと認識しています。

最後に都心の再生の問題です。都市の拡大、成長の時代を終えた中、これからのまちづくりは、市民の生活の質を高めるとともに、札幌を世界にアピールし、都市間競争の中で確固たる地位を築くことが重要です。こうした取り組みを先導していく都心については、消費、文化、娯楽、ビジネス、居住といった様々な面において、多様な選択ができるように再生していくことが必要であると認識しています。

また、都心部での交通については、路上駐車や荷捌きなどにより道路が混雑し、排出ガスによる大気汚染など環境にも影響を与えていることから、適正な自動車利用や効果的な道路の活用に取り組む必要があると認識しています。

右側の図19についてはコンパクトシティの考え方です。「札幌市都市計画マスタープラン」にある都市づくりの理念を示しており、コンパクトな都市構造への再構築を「都市全体」と「地域」の2つの視点から説明するものです。

都市全体の視点からは、都市全体として機能的なまとまりを保ち、より魅力的で活力あふれるまちとなることを重視して、そのために市街地の拡大抑制を基調とし、既存の都市基盤を有効に活用しながら都市の魅力と活力を向上するものということを考えています。

また、地域の視点からは、身近な徒歩圏内に日常的な生活を支える多様な機能がまとまった便利で快適な生活圏がつけられることを重視して、そのために居住機能を中心に、買い物、仕事、学習などの多様な機能の連携、複合を図るものです。

図20は、既存の都市基盤がかなり高い水準に達しているということをお示しするものです。第2回の全体会議でもお示ししましたので、ここでは説明を省略させていただきます。

図21は、札幌市の人口と自動車登録台数及び公共交通輸送人員の推移を示したものです。公共交通機関が一日あたりでどの程度の人数を運んでいるかというところでお示ししています。自動車登録台数が人口の伸びを上回って増加している一方、でプロットされた実線の公共交通機関が徐々に低下をしている状況です。

図22は、パーソントリップ調査における公共交通機関の割合を示すものです。

パーソントリップ調査とは、交通の流れの元である人の動きを把握することを目的としておりまして、どのような人が、どういう目的で、どこからどこへ、どんな交通手段を使って移動したかというような、人の一日の動きを把握することによって、現在の交通の実態を総合的に調査するものです。

棒グラフ中、上にある2区分が公共交通機関を示しておりますが、この構成比が低下しているということから、図21の公共交通機関の減少が、人の移動つまりトリップの減少によるものではなく、自動車や徒歩など他の移動手段との関連などによるものであることを示していると認識しています。

図23は、「公共交通機関と自家用車の利用について」の市民アンケートの結果です。ここには掲載しておりませんが、通勤通学で利用している主な交通手段として最も回答が多かった「自家用車、会社の車」を選択した人に対して、公共交通機関に換えることができる条件を回答してもらったものです。

「地下鉄・バスなどの便数の増加」が多く挙げられていますが「以上のこと、これは、その他の選択肢の事柄ですが、それが改善されても公共交通は利用しないあるいはできない」などの意見が多い状況です。

図24は歩行者や自転車雑然とした札幌駅前通の状況を写したものです。

図25、26は、都心まちづくり計画策定に際して、札幌市民の都心における活動実態などを調査したものです。

図25の「都心へ行く目的」では、買物、外食・飲み会などの理由が多い状況です。

図26の「都心で今後取り組んで欲しいこと」では、「街なかの美化・緑化の推進」や「安心して移動できる交通環境の整備」などが上位を占めている状況です。

資料の説明については以上です。

#### (4) 意見交換(現状と課題など)

小林会長 一度ご質問を受け、休憩の後、再開したいと思います。

今、日本全体で議論をしようとしている項目の一つに安全で安心な住環境をどうするかということがあります。防犯も含めてこれは地域再生、都市再生の大きな柱になります。元気ビジョンには書かれていませんが、これを含めて議論をしても構いませんか。事務局(調整課調整担当係長) はい、構いません。

小林会長 正式な名称はまだ決まっていますが、平成16年度中に北海道が安心・安全なまちづくりの条例をつくります。17、18年にやるという話を繰り上げて16年にやろうということになりました。全国的な問題ですし、北海道、札幌も含めて非常に大きな課題になっていくのでぜひ頭の中に入れて検討していただければと思います。

札幌市では環境基本計画の見直しをしていますよね。住民の環境に対する意識が非常に低いということに対してどのように考えていらっしゃるでしょうか。

事務局（環境計画部環境計画係長） 環境基本計画を改定するに至った理由は、この計画は市民、企業を含めた環境政策の基本となるのですが、市民、企業がともに推進していくという部分が弱いからです。環境審議会でそこを強化していく方向で審議していただいています。

小林会長 重要なテーマだと考えているという意味ですよね。具体的にはどんなことになりそうですか。

事務局（環境計画部環境計画係長） 審議をしている最中ですが、一つ言われているのは重点施策ごとの目標が掲げられていますが、それを全体的に推進していくために市民と企業を含めた強化策を盛り込もうということです。

小林会長 別の言い方をすると、例えば、交通手段に関して、もう少し市民が積極的に関わっていける環境を整備する政策をとというような、投げかけもしながらということでしょうか。

事務局（環境計画部環境計画係長） 計画の策定自体にも市民が積極的に関わっていくという方向で検討しています。計画推進のチェック体制等も含めて、行政だけでなく市民の方にも入っていただくという議論がされています。

小林会長 この分科会での重点戦略課題には「地球環境問題への対応と循環型社会」「歩いて暮らせるゆたかで快適な街の創造」ということがありますが、それを環境とリンクさせて考えるのなら、市民が自主的に交通手段を育成するような施策を持つべきだということも言っても構いませんか。

事務局（環境計画部環境計画係長） こちらの議論でということであれば構いません。

小林会長 ほかに何かありませんか。

中島委員 量が多すぎて、質問をするまで整理できていないのが正直なところですが、具体的な意見を出しながら考えていきたいと思います。

小林会長 それでは5分間休憩しましょう。

（休憩）

小林会長 それでは再開します。資料から外れてもいいのでご提言、ご発言をどうぞ。

中島委員 文化・人づくり分科会の前半部分だけ参加させていただきました。そこでも膨大な量のご説明があり、当然専門家でもありませんので、ついていくのが精一杯です。市の方々はいつもこれを考えているわけですから、私が毎日映画館のことを考えているのと同じで、どうしてもハンデがある。今回私はこの環境・都市機能分科会では専門家としてではなくて、芸術の分野でいろいろとやっている観点から市民感覚で意見を出すという解釈をさせていただきました。

全体会議や面接の際にお話ししましたが、私のポイントは2つあります。一つは、新しいものと古いものが同居できるまちづくりを考えたい。私は都心部の動きには非常

に関心があります。都心部というのはいろいろな人が見たときにストレートに分かる場所だという気がしました。都心部がモデルになり各区のいろいろなところに波及していくので都心部は重要だと思います。JRタワーができたことによって都心部のバランスは完全に崩れたと思っています。狸小路等の古い味わいのあるものが、さびれてしまっているのを何とかしなくてはならない。大通周辺地区と駅側とをバランスよく発展させるのは政策でないとできないと思います。市場原理に任せていると、古いものの居場所がなくなっていくだろうと思います。

全体会議でお話ししましたが、狸小路の遊楽館の閉鎖に伴ってお年寄りの方が「自分の記憶がなくなる」というような、単に建物がなくなるだけではなく、自分が何十年にわたって親しんできたものがなくなってしまうという精神的な不幸さを実感しています。映画館がなくなっても、そのままの形で別のことに再活用するということができないだろうかと思っています。外観が保証されると精神的な安心感も大きいということを考えていきたい。

これからは、フィルムコミッションが札幌市の将来、まちづくり計画における4分野に大きく関わってくると思います。今日、たまたま北海道新聞の朝刊に札幌フィルムコミッションロケーションサービスの米田課長が「北国らしい情緒豊かなロケにうってつけの建物やまちなみが、札幌からどんどん消えていっているのが最大の悩み」と書いています。映画は、新しいものではなく古く匂いのあるもの、ムードのあるものを求めます。同じように精神がそこにつながってくるのではないかということが私の発言のベースにあります。

小林会長 大切なことだと思います。議論は必ず横につながっていくのが当たり前なのであまり気にせずに進めていきましょう。

大坂さん、普段お考えになっていることでぜひお話ししたいということがあれば。

大坂委員 資料をたくさん送っていただいて消化不良のため、どうということをお話したらいいか悩んでいました。一市民として知っていることで発言するしかないと思いました。

私はまちづくり情報誌「めむ」の編集スタッフをしています。まちづくりに関するスローなメディアとして、メンバーが発見したことを伝えています。市民の視点で気づいたことをいくつか挙げていきたいと思い参加しています。

小林会長 市民がまちを使っていくために必要な情報がないということとですか。

大坂委員 たくさん情報発信が行われていると思いますが、市民に伝わっていないことが多いのかと思っています。例えば、前回特集したのは「タダで使えるお知らせメディア」。公共施設に活動をアピールできるようなスペースがあるとは思いますが、具体的に動こうとしたときに分からないと思います。そういうことを分かりやすく噛み砕いていきたい。

今回の分科会ですと、公共的なスペースがたくさんある中でそういった空間がスロー

スペースとして機能するようになればいいと思っています。都会なのでせわしいのは仕方がないとは思いますが、そんな中でもほっとできる空間が皆が行き交う場所にたくさんあればいい。既存の空間もあるとは思いますが、なかなかそこで憩える感じではない。

例えば、大通公園でももっと気軽に座れるような感じですか、札幌駅にもいくつかベンチがありますけれど、もっと何か交流ができるような感じですか。

小林会長 大通公園は、寒くなると使えなくなりますよね。大通公園は冬もきれいだけれど、見ようと思うと、喫茶店に入るとか、お金を払わないといけない。ただで休める場所というのはない。

大坂委員 例えば地下の通路でも、長く居座る人がいて困る等の問題もあるかもしれませんが、もっとにぎわった雰囲気にしてみんなが楽しく憩える場所になってほしい。

小林会長 別な言い方をすると、まちなかで誰でも使えるような公共的な空間を増やすということなんでしょうね。

大坂委員 既存の場所をもう少し交流できるような空間にする必要がある。

小林会長 ターゲットはどこですか。

大坂委員 思いつきやすいのは地下通路で、市民から要望、活用策がいろいろと上がっているというように聞いています。冬場を考えると、パフォーマンスができる、もっと気軽に休んだりできるような、ランチが食べられるような空間が増えるといいのではないかと。

小林会長 「オープンカフェの椅子の数はそのまちの文化度を表す」とある人が言っていました。

林さんいかがですか。

林委員 コンパクトシティ研究会で研究をしていますので、基本的にはその辺の話をさせていただきたいと思います。今お配りした資料の説明をすると、とても長くなるので基本的には目を通していただいて疑問等がありましたら質疑応答をしていただきたいと思います。

これは去年、コンパクトシティ研究会が「北のまちづくり協会」というところの研究会で提言したパンフレットです。先ほどの事務局の説明の中にも「コンパクトシティ」という言葉が出てきましたし、ポピュラーな考え方になってきていますので、細かいことは説明しなくてもいいかと思います。要するに市街地のエリアを高密度集約化することになります。パンフレットの中にはなぜコンパクトシティにするべきなのかということや、コンパクトにするとどうなるのかというメリットを整理しています。

今日お配りしたものを説明しますと、1 ページ目は長岡技術科学大学の中出先生が使われていたテキストからのコピーです。これがコンパクトシティという観点から見たときのいろいろな通知表のようなものにとらえていただければと思います。結論から言いますと、左上のブロックにいけばいくほど、コンパクトシティという側面から見た場合の優等生のまちということで、現状としてはコンパクト化しているまちも存在します。

その少し下に札幌が位置付けられています。

90ページをご覧ください。かなり前に都市基盤公団が整理した資料のようですが、住宅の種類、中層住宅と低層住宅でエネルギー消費がどれくらい違うのかを試算したものです。コンパクトシティを進めるときには施設の集合化、複合化が大事になるので、その辺でどのくらい差が出るのかという参考資料です。中層住宅は集合化している住宅と理解できますが、そうするとエネルギー的にかなり効率が上がるということを示しています。

その次の44ページ、図3-3-9は自動車のエネルギー消費量です。一人を1km運ぶときの公共交通機関との比較で、相当なエネルギーロスが発生しているという話です。こういったところからも公共交通機関を使うというのが、相当環境に優しい暮らしやまちづくりになるということが推測できます。

最後のページにつけたのが研究中のものですが、どのようにしたらコンパクトシティを推進することができるのかという、実現への方策です。

正直なところ、コンパクトシティを積極的に進めるのは難しいと考えています。そう言っても何も進まないの、いくつかの切り口で検討を進めています。

小林会長 今のお話を聞いて思い出したのですが、事務局にお尋ねします。地下鉄の延伸のときの総交審（札幌市総合交通対策調査審議会）で提案したようなことはこの分科会で紹介しなくてもいいんですか。できるできないは別にして。循環バス等の話や、公共交通に乗り換えるためにはどんなことを考えるといいかなど、いろいろなことが出ましたよね。

事務局（交通企画課長） 特に13年に出された答申では公共交通をどうやって活用するかという議論をされていますので、ご提供することは必要なのかもしれません。

小林会長 ぜひ提供してください。あれは地下鉄だけの話ではなくて、公共交通全般の話ですから。

林さんの話を乗り越して申しわけありません。おっしゃることは、平成16～18年に実施される新まちづくり計画の中に置きなすとどのようになるのでしょうか。われわれはどこに盛り込むかを議論しなければならない。問題を重点政策に反映させるということをしなくては、われわれの議論は素人議論で終わってしまう。

林委員 この3年間ぐらいでできるのは、専門のプロジェクトチームをつくり本格的な議論を進めていくことだと思います。

小林会長 何についてですか。

林委員 推進策についてです。

小林会長 一方でコンパクトにしようと言っているわけですよね。

林委員 言っているけれども実現方策がなかなか難しいので、具体的にそれを詰める作業をしなくてはならない。

小林会長 例えば。

林委員 われわれのチームはこれだけ案をつくりましたが、それぞれの推進方策をどのように具体化するかという点で相当専門的な知識が必要になります。法制度等とからめておかないと実現はできないと思いますので、それを札幌市としてどのように取り組んでいくかという具体的な議論が必要だと思います。

小林会長 個人的な立場からコンパクトシティについてお話しします。

コンパクトシティという言葉についてずいぶん誤解があります。20年程前にコンパクトシティが日本に紹介されたときに、まちを小さくするということがコンパクトシティだと誤解された時期があります。今は、コンパクトシティではなく、サステナビリティやサステナブルシティと言われている。どのようにエネルギー循環、物質循環を含めて環境負荷が少なく、安全に生活ができ、コミュニティが形成されていくようにまちをつくり直していくのかということを使うわけです。

これはかなり根が深く裾野の広い議論になると思います。もしやるのであれば、コンパクトではなくサステナブルにしないと誤解が生じる恐れがあります。

先ほど中島さんがまちの中心部のお話をされました。まちの中心部も、当然重要な課題の一つです。もう一つ重要な課題があります。オリンピックがあったのが1972年です。1960～1980年くらいにかけて札幌は急速に動きました。そのころ札幌に住みついた人たちは今60～70歳台で、子供はいなくなり単身です。そういう人たちのゾーンがあり、その外側にここ10～15年くらいにできた40～50代くらいの人たちのゾーンがあります。

問題は、60～70歳台の人たちのエリアで、人もコミュニティも少なくなっていますが、それでも社会基盤はしっかりしています。ここをどのように再生していくのが非常に重要になってくるだろうと思います。

中島委員 この間S T Vで行われたワークショップに参加して、こういうことなんだと少し分かってきました。つまり、都心は次のビジョンへのモデルケースで、それがあれば、各地域において関連した形で核になるものができ上がっていくだろうということです。そういったことが議論されていました。

どこまで議論できるかは別として、都心でモデルケース的な議論をしたほうがやりやすいのではないかと思います。私の友人が住んでいる地域のコミュニティが崩壊しているということがありますので、コミュニティの再生ということについて非常によく分かります。そのためにも何らかの形でコミュニティ再生についても盛り込んでいく方向性が出せたらと思います。

市民が考えていくためには、刺激がないといけません。先ほど市民意識が低いと言われましたが、そう言われても困ってしまいます。参加型ということ考えたときに、大通公園で植林をするということをぱっと思いつきました。みんなでそういった象徴になるようなイベントをやる。

小林会長 植林ですか。

中島委員 植林というと通常は山の方でやりますが、そうではなくて大通公園でやる。まちなかでやるからみんなに注目されるという発想です。この間のワークショップで、創成川のアンダーパスを議論していたのですが、大通公園とつながってほしいと思います。中央部分に交通を通さないといけないからつながらないという案が市役所から出されましたが、私はそれならばアンダーパス化しないほうがいいと思いました。つながるという部分で何か一つ象徴が欲しいと常に思っています。都心部は車が渋滞するのであまり都心部に入らないというふうにしたほうがいいのではないかと思います。

小林会長 私なりに解釈をすると、規制もたくさんありますが、そういうものをリノベーションすることの大事さをまちなかで緑再生を協働でやることで訴える。それを積極的に支援するという含めて、モデル的にやるということですか。

中島委員 そうですね。先ほどの、古い建物の利用にしても補助金が出ないのかなとか単順に思います。政策があればそれは形になるのかなと思っています。

大通公園は冬は仕方がないと思っています。郊外ではなく都心を考えているので、大通公園で歩くスキーができればいいのになと思います。

小林会長 都心が大事だということではなくてシンボリックにということですか。

中島委員 そのとおりです。

もう一つ、まだどうなるかは分かりませんが、札幌駅と大通間の地下通路についてです。私は通路ができて地上を車が走るということであれば最悪だなと思います。地上のモデルが考えられずに地下通路がつくられるのは、すごく危ないのではないかと思います。ただし、地下通路を通路ではなくてパフォーマンスをできるような場所にしようという感じでアイデアが出たのであれば賛成です。通路ではなくて溜まり場にすればいい。会社勤めをされている方のための通路という考えではなくて、そこを通るのは不便だというくらいになったほうが、先ほど大坂さんがおっしゃったような文化的なスペースの発想になっていく。都心部では効率で物事を考えないことが重要ではないかと思います。

小林会長 仙台の定禅寺通では今、片側3車線の道路を1車線減らして緑を増やすということが決まりました。

中島委員 具体的な施策になるかは別として、地下通路の話は避けて通れないですね。私は駅前通から中島公園までの道路が全部歩行者天国になればいいという発想です。そういうものが駅前通にあると、来た人たちはカルチャーショックを受けて、札幌っていいまちだと思いますよね。車優先でない道路が駅前にあるということはシティセールスとしては抜群だと思います。

小林会長 中井さんお願いします。

中井委員 私は、今回のまちづくり計画でオーソライズされたシンボリックな魅力ある都市というのはどうあるべきか、魅力をどのように考えていくかがとても大事だと思います。人と車の関係から、歩いていて楽しいまちづくりというのも一つのまちづくりです

し、景観の美しいまちも一つの魅力だと思います。安心、安全のまちづくりも当然です。循環型社会をつくるということも魅力だと思います。そういったものが複合的に機能しながら、かつそこに人が住んでいるということが都市として大事なわけです。

それではどうするかと考えたときに、行政で(まちづくりを)検討するとともに、行政サイドから市民にどうやって降ろしていくかが大事だと思います。一個人となったときにはパブリックな空間と関わる際、割と尻込みしてしまうのではないのでしょうか。こういった場で話すのは簡単ですが、一個人として、自分の家の前の道路をどうするかなど、都市空間の構成要素と関わっていくときにはどうしたらいいのかわからないというのがほとんどの人の現況ではないのでしょうか。ですから、すばらしい計画があってそれを浸透させるためには、個人としてできることがあるということを示してあげることが必要だと思います。例えば環境問題で言うと、自動車、省エネ等が温暖化に関わっていくというような、その様なまちとの関わり方を示していく「まちづくり読本」のようなものが現況では存在していないというのが、とても大きな課題だと思います。

前回、全体会議で申し上げましたが、例えば、横浜市の戸塚区で出しているまちづくりの小冊子があります。内容としては浅いですが、分かりやすく辞典のようになっています、それをただで配っています。自分たちの身近なことに疑問を持ったときにどこに行けばいいのかなど、本当の取っ掛かりから示すようなものが現況ではないのではないかと思います。

一般市民に対する働きかけと同じことが小中学校でもできるのではと思います。一般の人たちが、何ができるか、身近な環境との接し方ということを学び知る方法が必要です。住民参加、NPOとこれだけ言われていますが、本当に関わっていくことが具体化されていないのではないかと疑問を持っています。

考え方としてはすばらしいものがたくさんでき上がりつつあり、計画としても戦略的なものがたくさんありますが、そういったものと一般市民とのつながりが見えていなければ、市民は新聞報道されても、自分は関係ないとなってしまうことがあるわけです。自分でも何かできることがあるのではないかと考えられる「パブリックな精神」を持つことが新しいまちづくりにおける協働、パートナーシップが具体化されていく、あるいは実際に動いていくときの要素になるのではないかと思います。

先ほどの駅前地下空間ですが、北海道の場合は雪のことを考えるととても大事だと思います。省エネと結びつけて考えると、ロードヒーティングや除雪をしなくていいということであれば、地下空間、スカイウェイがうまく連続していけば、エネルギー消費が少なく維持管理が楽な空間になると思います。

札幌駅の南口が整備された点で他都市との違いを挙げると、道外の大都市の多くは駅前に車と人を分離するために人工地盤、歩道橋のようなものがたいていできます。札幌は地下空間が大変発達しているおかげで、そういったものがなく開放的な空間になっていると思います。それはとても大きな財産ではないかと思います。地下空間を大通公園

までつなげていくときには、人工地盤、ペDESTリアンデッキが必要ないということが南口の景観を良くしているということを考えてほしい。地下空間をつなげるときに一番大きな問題は緑の問題だと思います。現況の緑を減らした場合の駅前通は看板の山でしかないということを考えてほしい。どうのように緑を再生させるか、うまく保全していくかがとても大事なことだと思います。

両サイドに建っている建物との関係で、地下まで建物を掘り起こして、そこに光が入ってくるようなサンクンガーデン的なつくり方もあり得るのではないかなと思います。新しく建つ建物は地下空間をオープンにして地上との関係をうまくつくっていくということがとても大事になってくるのではないかと思います。例えば東京の新橋駅から大江戸線へ向かう間はそういったことをやっています。地下を歩いているのにそういう気がしない。ああいった空間は北海道にとっては貴重になるのではないかと思います。地下に居るけれども雪が降ってくるのが見えるということも面白いと思う。

もちろん交通環境、循環型社会等も大事ですが、まず第一に都市の魅力をつくってほしい。さまざまな部署で環境、交通、緑等のことが考えられていますけれど、おのおのが別々に上手くいけば魅力が出てくるかということそれは疑問です。それらが統合されたときに札幌の顔として魅力ある都市空間をつくることが大変大事なことだと思います。そのときに、時間軸としての歴史も捨てがたい魅力なわけです。

そういうことが目標としてはあるのではないかと思います。最終的には札幌のまちの魅力をつくることだと思います。

小林会長 最初におっしゃったことが私はすごく面白いと思います。今、全国規模の教員組織と付き合っています。小学校の先生がまちづくりを子供たちに教える際に、先生は素人なので何をどう教えていいのか分からないからですが、これが20年経つとまちのつくり方、使い方、まちのセンスが変わってくるだろうと思います。基本目標のグループングでは「ゆたかな心と創造性あふれる人を育む」ということになりますか。文部科学省の教育だけではなくて、まちを使っていくマナー等を含めた教育や、まちを使うときの環境に対するセンスをつくるための「まちづかい読本」のようなこともしないといけないと思います。計画をやりっぱなしで、やるのはそれぞれの事業ということにはならないのではないかと、そういうことをおっしゃったと思います。

もう一つ私が勝手に解釈したのは、たまたま今、シンボリックに駅前が出てきましたが、札幌市が長期総合計画でいつも書いていますが、何もやらないというところがあります。広域交流拠点や地域中心核を設定し、その人口密度を上げたり、まちなか居住をリンクさせますということをやりますが、広域交流拠点をどうやってこれから熟成させていくのか。今は何もやらずになるがままです。先ほど1960～1980年のエリアについて言いましたが、それを全面的に改築するわけにはいきません。そのエリアの質を上げていくために広域交流拠点、地域中心核とリンクさせていくという戦略をとらなければいけません。そうすると横断的なものが集約されるという気がします。それは

モデルの一つだろうと思います。そのときに、先ほど中井さんが言われたように、市民、企業が何をやらなくてはならないのか、自分たちでスタンダードを決めて構わないというようにしてやる。そうすると市長がやろうとしている連絡所のことまちづくりセンターにもつながっていきます。そうすると、先ほど中井さんが言った、市民が自分は何をやらなくてはいけないのかということに近いものになるのではないかと思います。

中島委員 小林先生が初めにまちづくり条例に触れていました。防犯等にもリンクしてくると思いますが、要は条例という形で押さえつけるのか、自発的になるのを待つのか、どちらにするのかということがすごく大きいと思います。私たちは自発性にかけるということがあるわけです。連絡所も含めて、市がやりますよということでは成立しない。やはり地域の方々がどれだけ自分たちのニーズを上げてくるかというバランスが重要だと思います。基本としては何らかのモデルを熱心な地区と合同でつくることだと思います。そうして、ああすれば面白いのかと思うような人たちが出るわけです。

闇雲にやっているとなかなか自発性は生まれないので、都心の駅前通の魅力と、そういう地域のモデルというような2本立てが常にあると、それを材料に市民がいろいろと考えるという形だと思います。上田市長が言っているのは、連絡所やそこに行くとアンケートボックスがあるというようなものではないと思います。場を市民がどのように活用するかということなので、市民の自発性がなければ、場所があっても、というよくあるパターンになってしまいます。

先ほど中井さんが情報をどのように伝えていくかということをおっしゃいました。フィルムコミッションではロケをするときにどのようにしているかということ、地域でカーチェイスをやるということになると、1か月前から各戸にこういったことを何日から何日までやりますということがすべて知らされます。その結果、交通が止まりますということなどの事前告知がしっかりしています。日本はまだそこまでできていないですが、一番成功しているプサンの例では、地区でそういうことが行われるということに対して意見があればここに言ってくださいという形で、フィルムコミッションの体制がつくられています。常にそのようなことが確保できていることが重要だと思います。文句を言える場所があることにより市民意識がますます高まっています。

そういった形の情報の使い方は、札幌市の180万人すべてに対してはほとんど不可能ですが、戸単位の小さなエリアではできる可能性があります。マラソンの場合はほとんど引き受けているわけですから、モデルケースですよ。マラソンだったらいいけれども他のものはダメだとならないように、モデルケースをつくっていただきたいと思います。前例は常にあるという形をつくりたいと思います。

小林会長 いろいろな話が出たところで、大坂さんいかがですか。

大坂委員 メモを書いてきましたので先ほどの話に補足させてください。

小林会長 これは公開してもいいんですね。

大坂委員 はい。

例えばゴミ問題で市民も企業も一体感を持って進めるのが成功させるコツなのかなと思います。例えば仙台市のゴミのキャンペーンですが、知っている方もいらっしゃると思いますが「ワケルくん」というキャラクターを使ってキャンペーンをしていて、とても面白いと思いました。市民は面白い話でないとなかなか乗ってこないということがあると思います。今年は紙の分別でコピー機や印刷機をリースしている会社がコピー機にステッカーを貼って企業でも訴えらうということもされます。札幌市はゴミの分別を1,100種類載せている辞典をつくっていますが、とっつきやすさとしては仙台市の「ワケルくん」かなと思います。

ゴミの問題で言うと、大通公園ではたくさんのイベントがありますが、そういったときに、ポイ捨てしないで、というのではなく、もっと大々的にゴミの分別をしっかりと、適当に捨てる人が出ないくらいにする仕組みが大事なのではないかと思います。

その例として、東京にアシードジャパンという団体があります。大きなイベント等で会場のゴミを減らす「ゴミナビゲーション活動」ということをしているのですが、どのようにやっているかということ、会場にいくつかあるゴミ箱のところに人が入っていて、捨てにきた人と会話をしながら、もし間違ったところに捨てようとしていたら言って気づいてもらうという活動です。そういうことを大通公園でもやれば、ゴミ分別は大事なんだということを訴えられるのではないかなと思います。

先ほど連絡所のお話がありましたが、そういったところの機能として、市民が何かに問題意識をもって行動したいと思ったときの手助けがもっとできるような拠点になればと思います。手助けというのはやはり情報かなと思います。今回のように資料をたくさんいただいても理解しきれないことがたくさんありますし、そういうことが分かりやすくなるような具体策をしていく必要があると思います。

小林会長 退職した市の職員がいればいいのではないのでしょうか。

大坂委員 そこでアクションを起こせるような場所があればいいと思いました。拠点がなくても、例えば図書館が遅くまで空いていると変わってくるのかとも思います。そういったところをボランティアが運営したらノウハウが身について、意識を持った市民が増えるかと思います。公園の管理運営を市民団体がしたりすると、公園で予想もしないイベントが行われるようになって、札幌は面白いと全国から注目されるかもしれない。

小林会長 ありがとうございます。

林さんどうですか。

林委員 なぜコンパクトシティかというところを補足させていただきたいと思います。

小林会長 なるべくタスクをつなげて分かりやすく説明してください。

林委員 とにかく私が主張したいことは、コンパクトシティをいかに実現していくかを考えていかなければならないということです。

小林会長 どこで実現すればいいと思いますか。一般論として、計画期間の3年とか次の5年とかで見通しをつけるというようなターゲットを定めないといけない。どういう

ところにターゲットを定めてどういうことをすると、どういう理念に達していくのかということを考えていかなければならない。

林委員 コンパクトシティには完成形はなく、常に進化を続ける取り組みだと思っています。3年や5年で達成できたというような形にはならない、そういうスタンスで見えています。ですから3年、5年で具体的に数値目標を設定して、それに向かって走っていくというスタンスでは見ていません。当面、3か年なら3か年はどういうプログラムで実現させていくのかというアクションプログラムづくりをするくらいではないかとイメージしています。

小林会長 中島さんは、特定のエリアをアクションプランの対象としてシンボリックにとおっしゃいましたが、どのエリアでどういうものをアクションプランの対象にすればいいと思いますか。

林委員 私は特に地域的な限定をしなくていいと思いますけれども、中心市街地活性化などの動きとからめますと、都心部を重点的なターゲットとして設定するということが多分やりやすいのではと思います。

小林会長 仮に都心をターゲットとしたときに、コンパクトやサステナブルということに関して具体的にどういうことが案として出てきますか。

林委員 提出資料の最後に法制度というグループがありますが、その2つ目の項目に「まちなかの容積率アップ」が書いています。例えば、都心部の高度化のためには、もしかすると容積率をもっと上げてほしいというニーズもあるのかもしれない。そういうニーズがあった場合に、なるべく都心部に機能を集められる仕組みをつくっていくということです。細かい具体的メニューとしては、都市計画の見直しという検討要素があり得ると思います。

小林会長 その話がよく出てきますが、容積率をアップすると車が増えますが、それをどのように解決しますか。

林委員 われわれの研究会では今それを研究中で、まだ具体的な解決策を答えられる段階にありません。

小林会長 現実に東京等を見ると、どのくらいの車の需要が出てくるのかという答えは見えている。そういったものを考えながらまちなかを考えていかななくてはならない。なぜそんなことを言うかということ「歩いて暮らせるゆたかで快適な街の創造」ということがあるので、それを念頭に置きながらどういう政策、方策をとるべきかということ来判断しなければならぬからです。行政に、こうして欲しいというのではなく、こうすべきだということと言わなくてはならない。

林委員 コンパクトシティの一つの効果としては、公共交通機関が利用しやすくなるという側面があると思います。ですから、車依存を脱却できる、解決することも不可能ではないと思います。

小林会長 JRタワーができる前には、交通についてもいろいろシミュレーションされ

たわけですが、土日は大変だという現実があります。商業ビルなので極端ですが、オフィスビルでも同じようなことが起こります。そういうことも考えて深く議論をしたほうがいいと思います。

林委員 そういう議論が必要だと思っています。

中島委員 少なくともまちなかで荷捌きや最低限のもの以外の車を締め出すということは具体例がすでにあります。狸小路は毎日朝8時から10時の間だけ車が通れるようにしている。時間制限でやれば簡単にできます。一般市民の方が買い物で来て車で運ばないといけないということの方がむしろ問題だと思います。車で行くのと逆に不便だということが具体的に出れば市民はものすごく反応します。そういうことが具体的な政策だと思います。

大坂さんもおっしゃったことですが、公共施設の24時間開放はぜひやりたいと思います。これは現実的に管理問題だけです。ICC（札幌市デジタル創造プラザ）が24時間運営を実現していますので具体的にできるわけですよ。要はそれを他のところでも何らかの形で広げていくことだと思います。全ての施設がそうである必要はないと思いますが、少なくともICCは使っているメンバーで自主的に管理をやっていく形になっています。

もう一つモデル的な形で考えていきたいと思っているのは、他の分科会のテーマとも関わってきますが、今の大通小学校の活用方法は決まっていますか。

事務局（調整課長） まだ決まっていません。

中島委員 あそこそNPOなどのまちづくり拠点のモデルに使うべきだと思います。具体的にどのように使うかは別として、市民が、24時間といかなくても、夜遅くまで集まれる場所として、こんなにいいところはないと思います。あれをそのまま使いたいと思います。子供、学生になったような気分でいろいろなプロジェクトが使っているというような、第2のICCのようにしたい。公共施設の開放によってまちづくりにとっても風通しのいいまちになると思います。

小林会長 今、中島さんのお話をうかがって、統廃合の問題もあるのでできるかどうかは分かりませんが、ありうるのではないかと思います。

それから大坂さんのメモと照らし合わせながら今の話を聞いていましたが、スローペースということ考えたときに、教育も22歳で終わるのではなくて、NPO活動も教育だと言うと語弊があるかもしれませんが、そういう部分もある。それをスローエデュケーションと言った場合に、札幌の中心部にはいろいろなスローがあり、それを豊かな自然環境とセットにするのが、札幌の中心を再生していくときの哲学になる。その一環として大通小学校のリノベーションにはこういうスローエデュケーションの組み立て方もできるという気がしました。

中島委員 前に創成小学校で札幌市がやっていた成人学校、あれはとてもいいことだと思います。

ここの分科会でのテーマではありませんが、他都市で実現されている夜間中学をぜひつくってあげたいと思います。今は、夜間中学は市民会館をベースにしていますが、市民会館が移設されるので教育委員会といろいろやりあっているみたいですけど。

小林会長 別の言い方をすると、都心を24時間活用しようということですね。

中島委員 そうですね。

中井委員 そのときに引っかかるのは省エネです。大型スーパーまで24時間営業という現状があります。ほとんど人がいないのにあれだけエネルギーを使うというのは、賑やかさは出てきますが地球環境問題には逆行しています。その辺の整合性を取る方法はないかということです。

小林会長 渋谷には東急文化村がありますが、なぜ携帯電話を持った若い人たちが集まらないかという、通じないからです。そういうまちなかを差別できると我々のようなおじさんたちの、若い人たちと関係のない世界ができる。

中井委員 24時間開放で気になるのは交通です。夜になると交通機関がなくなってしまふ。金曜日や土曜日だけ都市の機能が変わるというのも面白いのではないかな。

小林会長 JRバスならできるんじゃないですか。

中島委員 現実に毎日24時間使うくらい市民のエネルギーがあれば札幌はすごく良くなると思います。そういう理念的なキャッチコピーとは別に、どこまでやるのかということがあると思います。

それとこの間、映画館を使った体験学習を月寒小学校の子どもたちに対してやりましたが、子どもたちはすごくまじめに聞いてくれ、映画館でしゃべってはいけないということをおそらく初めて知る状態ではありました。公共空間だということをお子にいろいろなパターンで体験学習させることが札幌市のためになる。

小林会長 まちづくりなどを一生懸命やっていた退職した職員が、私たちはこういうことを考えてきたんだということをお子に分かりやすく説明するというようなことも考えられますね。

事務局（企画部長） それはやる気のある職員がボランティアでやってもいいですね。

小林会長 そういった方はいるでしょう。

中島委員 この間のワークショップの席に、実は都市計画課にいましたという方がいらっしゃいました。

小林会長 一言ずつ、1分ほどで次回はこういうことをテーマにしたいということをお踏まえてお願いします。

中井さんお願いします。

中井委員 私は何を基準にしてまちをつくっていくかというときに、「住んでて良かった」と思えることだと思います。それが実現していくようなまちであって欲しい。

今までは、どちらかといえばこれまでの縦割り組織でやってこれたことが多いわけです。ですから、そこにプラスアルファできるような各領域をクロスオーバーさせる内容

を検討していきたい。それらをどのように実効性を持ってやっていくかということを考える機会にしたいと思います。

小林会長 中島さんお願いします。

中島委員 今日いただいたデータで、アンケートは非常に面白いです。要は市民の方に興味を持ってもらうところは2つあって、一つはアンケートでトップの「緑が多くて自然が豊か」というところをもっとプッシュするということ。もう一つは逆にまだ関心度が低いところをどのようにプッシュするかということです。それは、大多数の人がそのように思っていることを示すとすぐく反応が出るから、また、そればかりをやってもまちの成熟度は上がらないからです。そういうビジョンで出していく必要があると思います。

小林会長 林さんお願いします。

林委員 各委員からいろいろなアクションプランが出され、それを複合的に組み合わせで密度の高い、効率のいい相乗効果の出る提言ができたらいいのではないかと思います。

小林会長 大坂さんお願いします。

大坂委員 活動している市民は確かに多くないのかもしれませんが、少ないと言ってもどうにもならないので、そういう人がいるということを知ってもらうようなチャンスがくれたらいいと思います。実際にできそうなプランや、他でやっていて面白そうな事例を拾っていききたいと思います。

#### ( 5 ) 議論のまとめと次回の議題確認

( 一部省略 )

小林会長 ビジョンをまとめる際に注文があります。資料3で「ビジョン編の構成イメージ」の成果指標についてですが、それぞれお話いただいた中に成果指標の数値そのものは出てきていませんが、どういう設定をしたらいいのかは出てきていると私は理解しました。そういうものも事務局まかせにしないでなるべく出すようにしませんか。

次回は皆さんの持論に加えて、どういう場所で何を展開していくのか、あるいはどのような項目についてなのかということについて確定しながら、3年あるいは5年のシナリオを描いていくことをしたいと思います。

#### ( 6 ) 副会長指名

小林会長 副会長は中井さんをお願いしたいと考えてました。

( 「異議なし」と呼ぶ者あり )

中井委員 よろしく申し上げます。

#### ( 7 ) その他

事務局（企画部長） 太田委員からは、今日は遅くなったので失礼させていただきますと連絡がありました。

小林会長 分かりました。

#### 4 閉 会

小林会長 それでは本日の分科会はこれで終わります。ありがとうございました。